

TOPICS

2005

附属聾学校130周年を祝う

附属聾学校長 斎藤佐和

本年5月21日筑波大学附属聾学校は創立130周年を祝う式典・祝賀会を行いました。本校は訓盲(啞)所創設の志をもった有志同盟「楽善会」結成の日、明治8年(1875年)5月22日を創立の時としています。以来130年、校地も校名も変化してきましたが、昨年から国立大学法人筑波大学附属聾学校として、国府台の豊かな環境の中、改修の終わった新校舎で21世紀を歩き出しました。

附属聾学校は、日本の聴覚障害教育の代表校として、聴覚障害児の可能性の追求を使命として130年の歴史を刻んできました。その成果は、自立した社会人として活躍している多くの卒業生、近年着実に増加している大学や大学院への進学者などによって証明されています。特別支援教育体制への移行の時を迎えて、これからの聾学校は教育の充実とともに、地域の聴覚障害教育のセンターとしての役割を果たすことが期待されています。本校はこれまでの伝統と実績から、日本の聴覚障害教育のセンターオブセンターの役割を果たすべき立場にいます。今後、附属学校教育局、特別支援教育研究センター、各附属学校、そして心身障害学系との連携・協力関係を深め、本校が果たすべきセンター的機能の明確化と実現に努力したいと考えます。

記念式典当日は、文部科学省を始め関係各方面からの多くの来賓の方を迎え、ともに祝っていただきました。生徒会長の未来志向の喜びのことばには感動の拍手をいただきました。是非本校HPでご覧いただければ幸いです。



《編集後記》

東京都立大学(首都大学東京)を離れて半年近くになりました。定年まで務めようと思っていた大学をやめる決心をし、大学の基礎教育の括り直しの仕事や教育の仕事に関わろうと職探しを始めました。縁あって、筑波大学の附属学校教育局にお世話になることになり、今一度、「生き直し」をしようと心に決めました。

「ゆとり教育」だ、いや、「学びのすすめ」だ、と振り子のように揺れる学校教育。教員の同僚性が危機に瀕し、団塊の世代の教員が大量にやめていく教育現場。一方で、主幹制を始めとする階層化が進み、公立の中高一貫校が生まれ、専門職大学院(教職大学院)構想が具現化に向かって走り出しています。

子どもたちや先生一人一人の思いを大切に「教育改革」が、少しでも前へ進むよう、知恵を出し合い、種をまき、育て、実らせる「ささやかな」努力の積み重ねが大切なきだと考えます。附属学校の構成員が、お互いの学校を正しく知る努力とともに、筑波大学の構成員に向けて、社会に向けて、附属学校の「いま」を発信し、新しい附属学校のあり方をともに模索することが大切となっています。いま、直木賞作家の山本一力の人生の機微の話を聞きながら、附属学校教育局の一員としての自分の「生き様」に思いを巡らしています。山本一力さんは、色紙に、「明日は味方」と書かれました。(生田 茂)

発行日……平成17(2005)年11月1日
 発行者……附属学校教育局教育長 谷川彰英
 発行所……筑波大学附属学校教育局 広報誌
 ポローニア編集委員会
 〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 電話 03-3942-6800
 編集委員長……篠原吉徳
 編集委員……千田捷熙・生田 茂・飯田範子・
 下山晃司・大村覚男
 デザイン……スピーチ・バルーン
 印刷……広研印刷

